

生きて再び
逢ふ日の
ありや

高崎隆治 撰

『昭和萬葉集』編纂顧問

私の昭和百人一首

教科書に書かれなかった戦争Part 4

梨の木舎



高崎隆治 撰

『昭和萬葉集』編纂顧問

私の昭和百人一首

生きて再び逢ふ日のありや

高崎 隆治(たかさき りゅうじ)

1925年横浜に生まれる。法政大学文学部在学中に学徒兵として戦争を体験する。

法政大学文学部講師、講談社『昭和萬葉集』編纂顧問等を経て立教大学文学部で「戦時下のジャーナリズム」を担当する。日本ペンクラブ会員。

主な著書 『戦争文学通信』『戦時下の雑誌』『戦時下文学の周辺』(以上風媒社)
『ペンと戦争』(成甲書房)
『非戦のうた』(日本評論社)
『戦時下のジャーナリズム』(新日本出版社)
『戦争詩歌集事典』(日本図書センター)

■教科書に書かれなかった戦争Part 4

私の「昭和百人一首」生きて再び逢ふ日のありや 1500円

1987年12月8日 初版発行

撰 著 高崎 隆治

装 幀 ローテ・リニエ

編 集 安江とも子・羽田ゆみ子

発行者 羽田ゆみ子

発行所 (有)梨の木舎

〒101 東京都千代田区神田神保町1-42日東ビル2F

☎03(291)8229 振替 東京6-167140

印 刷 (株)平河工業社

まえがきにかえて

「愛国百人一首」の時代

十五年戦争の末期に、「愛国百人一首」という好戦熱を煽りたてる歌集が日本文学報国会の短歌部会によつて編まれた。日本文学報国会とは一九四二年につくられた徳富蘇峰を会長とする職業的文学者の団体で、文学者とな名のつく大部分の人が参加していた。

しかし当局の熱心な推奨にもかかわらず、それはほとんど国民の関心を引かなかった。たとえば、当時文科の学生であつた私の級友たちのだれもが手にとらなかつたし、私たちの話題になることもなかつた。はつきり言えば、店頭にうず高く積まれた評釈つきのそれを、学生たちはおぞましいものでも見るように横目で見て避けていた。

私自身に即して言えば、戦わなければならないのなら、人に命令されな

くても戦うし、どうしても死ななければならぬのなら、こんなものを読まなくても潔く死んでやろと思つていた。その心の底には、私をそこにまで追いつめた者に対する呪いが渦巻いていた。私は「愛国百人一首」に採られてゐる歌の個々の作者にはなく、それを編んだ者に輕蔑の念を抱いていた。

私たち若者が死ぬことによつて、彼らは死なずに済むであらう——たぶん彼らはそのくらいの計算をたてて、一人でも多くの若者が血を流してくれることを願ひ、こういうものを編んだにちがいない、と私は考えていた。自らは、死ぬつもりなどいささかもなく、しかも自己一身の安泰を国家の安泰にすりかえ、それを大義名分として若者に死を要求する彼らを、かぎりなく憎悪しながらも、しよせん死なねばならない私(たち)に残された唯一の自由は、たとえば、おどましいとしか言いようのない「愛国百人一首」などを絶対に読まないということであつた。

とはいえ、私は私たち学生だけが、「愛国百人一首」を忌避していたと言

うつもりはない。評釈をつけてもなおそれは一般の関心をよぶことがなかったという事実は、説教や訓戒などに人びとが食傷をきたしていたからであらう。非売品の配布分を加えて総計百万部を超える膨大な量を刊行したにもかかわらず、その内容はおろか、今ではそういうものがかつて存在したという事実を記憶している者もほとんどいない。そのことが、「愛国百人一首」なるもののすべてを物語っているはずである。

しかしながら、「愛国百人一首」が国民の絶対多数にほとんど影響を与えなかったとはいえ、私はこれを編んだ人々に寛容であるほどのお人好しではない。同時にそれらの人々とその営為とを容認した戦後の研究者や文学者たちをも肯定することはできない。なぜなら、是を是、非を非とする精神をもたない文学者や研究者は、本質的に戦時下の研究者・文学者となんら変わるところのない存在であり、情況が変わればいつでも「新・愛国百人一首」を編んで国民に押しつけてくるにちがいないからである。今日の若い人々が、過去の戦争について、ほとんどなにも知らないでいることの

最大の原因は、戦後の文学者や研究者が、戦時下の文学や学問の一切について、言及することごとく避け通したからである。そのことは「愛国百人一首」などとはおよそ無縁の作品が少数ながらあの戦争下にも存在した、という事実すら隠蔽する結果を生んでしまった。「日本精神の昂揚」や「御奉公の誠」が、この国の人々にどれほどの痛苦や悲惨をもたらしたかを、それらの作品は如実に語っているはずであるにもかかわらず――。

おもえば、戦時下の著名歌人の精神的荒廃はすさまじいかぎりであった。中学や高校の国語教科書にその名を欠かすことのできない歌人、たとえばそのうちの一人である斎藤茂吉ですら、

あめつちにただひとつなる大^{おお}き勝^{かち}つらぬかむとするやまと魂

戦ひて必ず勝たむさだまりを吾^{われ}等は継^つぎてすすみに進む

などという、正気の沙汰とは思えない作をつくりつづけた。

かつて、

ゆく秋の大和の国の薬師寺の塔の上なるひとひらの雲

とうたった佐佐木信綱も、

まづろはず寇^{あだ}む国々撃ちて撃ちてしまむ空に海に陸^くにと、侵略主義の先端を担う歌を詠んで国民を鼓舞し激励した。

一人、二人の例外的存在を除けば、世にいう「歌人」のことごとくが戦争讃美・戦意昂揚の歌しか詠まなかった。したがって、本書が知名度のあまり高くない歌人や、まったく無名といってよい人たちによって占められることになったのも当然であろう。しかも、それらの人びとの大部分は二十代・三十代の若い人たちであり、あの戦争によってもっとも大きな犠牲を払うべく運命づけられた世代であった。この事実を、私は今日の若い人たちに、ぜひとも考えてもらいたいと願わずにはいられない。

高崎隆治

まえがきにかえて
「愛国百人一首」の時代
I

きつと生きて帰つて
9

戦いはゴムマリにおよんで
93

明日知れぬ兵士
145

あとがき
214

凡 例

- 一 出典、単行本については歌誌と区別するために「」をつけた。
- 一 原作にはルビはないが、読みやすさを考慮して適宜付した。

きつと生きて帰つて



「東洋平和」のためとか「正義」とか「聖戦」とか、若者たちは戦争を正当化し美化する権力の謀略に乗ぜられて、強制的に戦場に追いやられた。

戦死すれば「護国の英霊」という言葉がぬかりなく用意されていたが、「死」は「死」以外のなにものでもなく、狂信的な天皇主義者が自殺志願者以外に、死を願う兵士など一人もいなかったというのが真実である。多くの若者たちも、「殉国」とか「護国」などという言葉に酔ったとすれば、それは追いつめられた者が「死」から逃れられないことを知って、「死」をみずからに納得させようとした結果である。

「思ひ多」き彼らは、当然のことながらそうとても思わないかぎり「生」をあきらめることができなかった。一見、戦争末期の歌とも見まちがえるこれは戦争のごく初期の作である。

高井敏子

美しき名^なに死すといへ思ひ多く若き命^{いのち}は
惜^おしからむものを

歌誌 水鏡 昭和7（一九三二）年3月号

陸軍への献納機を「愛国号」、海軍へのそれを「報国号」といったが、会社や学校や団体や地域社会などが単位で献金し、たとえば、「神奈川愛国第一号」機などと命名した。

街頭募金などは避けて通ることができたが、職場や学校などでは「非国民」と罵られ差別されるのを恐れて、人びとはなけなしの財布から五銭、十銭という金を出さなければならなかった。金だけでなく、地域では「国防婦人会」などが街頭に立って廃品回収なども行なったので、子どもたちは母親からの小遣いの道が断たれたりもした。人びとは、その飛行機が自分たちの生命や財産を守ってくれるだろうというわずかな期待で自身を慰める以外になかったのである。

「窮しゆく者」に見向かないというのは、募金を推進する者や率先して応じる者に対する非難だが、やむなく献金に応じる人びとには、もはや「見向」く余裕がほとんどなかった。

薄田幸子

愛^{あい}国^{こく}号^{ごう}の献^{けん}金^{きん}は日^ひ々^びに積^つまれつ^つつ窮^{きゆう}し^しゆ^ゆ
くものに人は見向かず

歌誌 ボトナム 昭和7（一九三二）年6月号

出征兵士の母や妻は、「軍国の母」「軍国の妻」ということで、子や夫の出征にあたり、めめしい振舞いをしてはならないといわれた。そしてもし戦死すれば「靖国の母」「靖国の妻」ということで、涙をみせてはならないというのだから、結局、どんな場合にも絶対に泣いてはならぬ、ということになる。

しかし、この歌の作者は、かならずしもそういう「掟」おきてにしばられたのではなさそうで、むしろ、涙を流すことが出征する夫によけいな負担をかけることを恐れたように思われる。本当は声をあげて泣きたいのだが、そのことで夫に後髪を引かれる思いをさせては、かえって夫のためによくないと思ったのではないか。おそらく、妻として本能的にそれを感じていたのであろう。あるいは、子どもが何人もいて、明日といわず今日からなんとか糊口ここうをしのがなければならぬ状態になつていたのかもしれない。